

年3回の「スリーアップ作戦」で 授業力、学習習慣、学力定着を改善

京都府 京丹後市立峰山小学校

「全国学力・学習状況調査」において、家庭学習に関する項目が全国平均を下回っていた京丹後市立峰山小学校。課題克服に向け、「授業づくり」「学習習慣」「学力定着」の改善に集中的に取り組む「スリーアップ作戦」を年3回実施。教師、子ども、保護者それぞれの意識変革を促している。

取り組みのポイント

- 学力向上のために、①授業づくりアップ、②学習習慣アップ、③学力定着アップ、を3本柱に据える。6、11、2月に、これらに集中的に取り組む「スリーアップ作戦」を実施
- 授業の様子や子どもの育ちなど、学校の日常を保護者とこまめに共有し、理解や協力を得やすくする

課題と手立ての基本方針

家庭学習に大きな課題

学力向上の3本柱を設ける

風格ある校舎が印象的な峰山小学校。峰山町は丹後ちりめんの発祥地で、代々この町で暮らす住民が多い。子どもの様子について、和田省三校長は次のように話す。

「純朴で落ち着いた子どもが多いです。学習面では、基礎的・基本的な内容はおおむね定着していますが、論理的に考える力や活用、正しい答えが出るまで何度も計算するよ
うな粘り強さには課題を感じていました」

家庭学習についても課題があった。竹本茂

教頭は次のように話す。

「09年度の『全国学力・学習状況調査』の結果に、我々はショックを受けました。家庭学習時間や読書量など、家庭学習にかかわる項目が全国平均を下回っていたからです。それまで、家庭学習指導に学校全体として取り組んではいませんでした。しかし、家で学習する姿勢が身に付いていないことは、学びに粘り強く向かう姿勢の不足につながるのではないかと思います。学ぶ姿勢なども含めた総合的な学力を付けるならば、学校での取り組みと共に家庭での取り組みも充実させ、両者を力を高めていく必要があると考えました」

同校では、家庭学習のみを改善するのでは

S c h o o l D a t a

◎1869(明治2)年開校。長年、校内研究に力を入れて取り組む。2007年度には京都府教育委員会の研究指定を受けて、算数の研究発表を行った。近年は学区にある峰山中学校との連携にも力を入れる。



校長 和田省三先生

児童数 213人 学級数 10学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒627-0013 京都府京丹後市峰山町不断1

TEL 0772-62-0077

URL <http://www1.kyoto-be.ne.jp/mineyama-es/>

公開研究会 未定

授業づくりと共に深める家庭学習

図 学力向上へ向けた3本柱

1 授業づくりアップ

- ・「発言でつながり合う授業づくり」を目指し、教員研修を充実する
- ・授業や児童の様子を学級通信等で伝える

2 学習習慣アップ

- ・家庭学習の量・内容を改善し、家庭学習習慣を身に付けて、その伸びを子ども、家庭と共有する
- ・高学年では、中学校進学に向けて自学自習の力を付ける

3 学力定着アップ

- ・毎日15分のチャレンジタイムでのプリント学習や放課後の補習にて、基礎学力の定着を目指す
- ・学習規律、学習態度を更に高める

* 同校の資料を基に編集部で作成

なく、学校と家庭の両方の取り組みを含めて学力向上の施策を考えた。それが、「授業づくりアップ」「学習習慣アップ」「学力定着アップ」の3本柱だ(図)。この中で、同校が最も重視するのは、「授業づくりアップ」だ。

「子どもの学力向上が終着点で、そのために最も大切なものは授業です。学力向上につながる授業をつくるためには、教師の授業力向上が欠かせません」(和田校長)

水曜日は「授業研究の日」として、担任が研究授業を行う。また、日常的に職員室などでも授業交流や教材研究をオープンに進めている。目指すのは、子どもの発言をつなぎ、学び合いを通じて思考力を育む授業だ。10年度の研究は国語を中心とし、特に物語文の指導に力を注いでいる。

加えて特徴的なのは、保護者への日常的な発信だ。学校の方針は学校だより、授業の様

子や子どもの姿は学級通信で伝える。特に学級通信は頻繁に発行し、研究主任の木本敦子先生をはじめ、毎日作成する担任もいる。

「学校での学習について具体的に伝えれば保護者も興味を持ちますし、子どもの様子を共有することで信頼関係が深まります。学級通信を書く作業は、毎日の授業や学級経営を振り返ると同時に、指導の方向性を考えることであり、授業づくりにも生かしています」(木本先生)

「学力定着アップ」のねらいは、基礎学力の定着と、子どもの自信や意欲を育むことだ。取り組みはプリントは難しい問題にせず、シンプルで「やりきる」ことを大切にしている。

家庭学習の位置付け

授業内容と関連した家庭学習で授業を深め、学習意欲を促す

「学習習慣アップ」では、家庭学習の習慣付けを工夫すると共に、家庭学習の内容についても検討を進める。同校では家庭学習の目的を、①授業の補完、②学習習慣の定着、③主体的に学ぶ姿勢の育成、としている。全学年で音読、漢字の書き取り、計算練習などの宿題を課す他、研究教科の国語においては授業内容と関連した宿題も出す。

例えば、物語文の学習では、子どもが考え、書く時間を授業中に十分に取るのが難しい。

そこで、家庭学習で登場人物の気持ちや行動の理由などを考えさせておく。授業では思考や表現の時間が確保され、授業のねらいが達成されやすくなり、学習が深まる。

「一斉授業では、集団で考えを出し合いながら思考を深めていきます。子どもが個々の考えをしつかり持ち、意見を出し合えば、集団の思考が深まりやすくなります。自分の考えを持って授業に臨むので、授業に意欲的にもなります」(木本先生)

こうした課題を出した時には、家庭学習ノートは授業前に確認して返却する。教師が丸を付けたら、良い考えに線を引いたりすることで、子どもが自信を持って授業に臨めるからだ。子どもは安心して自分の考えを発表でき、グループでの話し合いも深まりやすい。



京丹後市立峰山小学校
木本敦子 Kinoto Asuko
研究主任、2学年主任。「学級づくりは授業づくりから。子ども同士がつながり合う授業をつくりたい」



京丹後市立峰山小学校教頭
竹本茂 Takemoto Shigenori
「校長が示すビジョンを教室での実践につなげるため、子どもも教師も大いに学ぶ環境づくりを進めたい」



京丹後市立峰山小学校校長
和田省三 Wada Shozo
「先生方や子どもの気持ちを大切にしたい。『協働』と『信頼』でつながる学校をつくらなければならない」

「事前にノートを確認し、内容を理解していない子どもが多い時は、授業で丁寧に説明したり、補助発問を準備したりするなど、子どもに合った授業をしています」（木本先生）

授業と関連した内容のため、家庭学習への意欲も高まり、習慣付けにつながる。ただし、低学年は一人で考えるのが難しいため、こうした課題は3年生以上で取り入れている。

「スリーアップ作戦」の実施
●●●
学力向上に不可欠な3要素に
集中的に取り組む

3本柱は年間を通じて重視しているが、年に3回、集中してこれらに取り組む時期がある。それが「授業づくり・家庭学習習慣強化月間」、通称「スリーアップ作戦」だ。各学期に1回、行事などの調整がしやすい6、11、2月にそれぞれ1か月間実施する。

「学力向上は、3本柱に総合的に取り組むことで初めて達成されると考えています。どれも年間を通じて力を入れていますが、行事などで忙しい時期もありますし、慣れも生じます。そこで、めりはりを付けて、全校的なキャンペーンを行って改めて意識を高め、教師と子どもが共に頑張る力を付けていきたいと思ひ、始めました」（和田校長）

「授業づくりアップ」については研修を集中的に行い、「学力定着アップ」については

今日のしゅくだい、できたかな。

	11月(月)	11月(火)	11月(水)	11月(木)	11月(金)	11月(土)	11月(日)
今日のしゅくだい	フリドリ 日誌	九九おぼえ 九九おぼえ	フリドリ 音読	フリドリ 音読	フリドリ 音読	フリドリ 音読	フリドリ 音読
名前を書いた。	○	○	○	○	○	○	○
数字や文字をいかに書いた。	○	○	○	○	○	○	○
テレビを見なかった。	○	○	○	○	○	○	○
しゅくだいでできた。	○	○	○	○	○	○	○
しゅくだいをした時間	6:30~7:15	6:00~6:30	9:45~10:30	15:45~16:30	15:30~16:00	17:45~18:00	6:30~7:00
しゅくだいがないにたいへんきょうが読書	なし	音読	フリドリ	なし	なし	なし	なし
えんぴつをけずった。	○	○	○	○	○	○	○
ふでばこのものがあまる。	○	○	○	○	○	○	○

今日のぶつがえり(がんばったことやできなかったこと)

おうちのから

写真1 2年生のチェックシート。毎日記録することで学習習慣の定着や生活習慣の改善を図る。子ども自身に1週間の自己評価をさせることも重要なねらい

学習規律・学習態度をより丁寧に指導する。

「学習習慣アップ」については、学年や学習状況に応じた1週間単位のチェックシートを活用する。例えば2年生では、宿題の内容や取り組んだ時間、「数字や文字をていねいに書いた」「テレビを見なかった」「しゅうちょうできた」などのチェック項目を設けた(写真1)。生活に関する指導を通して学習への構えを身に付けさせることがねらいだ。一方、5年生では、「学習・テスト予定」を見ながら子どもが自ら家庭学習の計画を立て、結果を自己評価するようにしている(写真2)。

「中学生になると、定期テストなどに備え、自分で計画を立てて学習することが求められる

12月13日 ~ 12月19日 5年 組

	13日(月)	14日(火)	15日(水)	16日(木)	17日(金)	18-19日(土・日)
学習・テスト予定		算数基礎テスト	国語テスト			新習習事始め 漢字ドリル仕上げ
目標時間	60分	60分	60分	60分	60分	60分
学習ドリル			理科基礎			
計算ドリル(プリント)						
半習チャレンジ						
できた(青)						
不十分(黄)						
残存(赤)						
自主課題						
反復課題						
別テスト課題						
生活チャレンジ						
読書						
ゲーム/パソコン						
就寝時刻						

①のカネリ

家庭から

写真2 5年生のチェックシート。自分で目標時間や学習する内容を決め、達成の度合いによって異なる色で塗って振り返りをする。学習やテストの実施予定日を記入しておき、自主学習で対策するように促している

ます。高学年では、そうした学習習慣を付けることを特に意識しています」（竹本教頭）

期間を定めて取り組むことについて、木本先生は次のように話す。

「年間を通してチェックシートを使うと、途中から記入がいろいろ加減になる恐れがあります。『忘れた頃に引き締める』という意味で今の方法が適切だと考えています。期間終了後も、しばらく家庭学習習慣は崩れません」

1週間が終わると、各自が振り返りを記入し、保護者にコメントをもらい提出する。保護者にはPTAの会合や学校だより、学級通信などで「スリーアップ作戦」の趣旨を繰り返し伝えていくこともあり、大半は協力的だ。

授業づくりと共に深める家庭学習

「ただし、この時期だけ、あるいは家庭学習についてのみ保護者に協力をお願いしても、うまくいかないと思います。学級通信などで学校の方針や授業の様子を伝えるなど、日頃からこまめに情報発信しているからこそ出来ることだと思います」（和田校長）

個々の子どもへの対応

個別支援や補習を行い 個々の学力差に対応

家庭学習の課題は一律としているが、個々の子どもの学力差を考慮する必要があるというの、同校の考えだ。

「理解が遅れている子どもの中でも、勉強が苦手だから、集中できないからと、その理由はさまざまです。自分だけ異なる課題を出されるのを嫌がる子どももいますから、必ずしも宿題の内容を変えただけが適切な個別対応ではないと考えています」（木本先生）

家庭学習時間の目安はどの学年も「学年×10分」だが、あくまでも推奨時間とし、個々の子どもの実態を踏まえて柔軟に指導している。その理由を竹本教頭はこう話す。

「学習のスピードや集中力は一人ひとり異なります。例えば、漢字の書き取りなどでは、丁寧に書くかどうかによっても要する時間が変わります。一律に時間を決めてよいのかと、先生方で議論した結果です」

学力差の解消に向けては、「学力定着アップ」の一環として、全学年で学級ごとに週1、2回、放課後に保護者の了承を得て、理解が遅れている子どもを個別に教えている。

「特定の子どもを残しても、みんなが応援し合う雰囲気があります。普段から誰にでも得意・不得意はあることを伝え、それを互いに認めて頑張りをつたえ合える学級づくりを心掛けているからだと思います」（木本先生）

成果

「スリーアップ作戦」を軸とした 学習習慣改善のサイクルが定着

子ども、教師、保護者のそれぞれに変化が見られると、竹本教頭は話す。

「授業研究を通じて、教師の課題意識が明確になり、つくりたい授業のイメージが固まってきました。それに伴い、家庭学習に求めるものが豊かになってきたと感じます」

日々の情報発信により、保護者の家庭学習に対する理解も進み、教師と共に子どもを育てると意識が高まってきた。

特に大きな成果が見られたのは、「スリーアップ作戦」だ。年3回の実施により、子ども自身が年間を通じて伸びを実感できているという。実践後に教師や子どもが足りなかった点を見直し次につなげる改善のサイクルが定着しつつあり、11年度も継続する予定だ。

和田校長が重視する

校長としての役割

先生方が互いに信頼し、意欲的に教育活動を実践できる環境をつくるのが、校長としての私のテーマです。その土台となるのは、一人ひとりの先生と十分にコミュニケーションを取り、思いや動きをしっかりと把握すること。そして、教室を回り、学級通信をよく読み、授業の雰囲気や子どもの気持ちを理解すること。そのような実態把握を通して課題を整理し、全体に発信することを大切にしています。本校の素晴らしいところは、先生方の信頼関係がしっかりと出来ていることです。この雰囲気を保ち、研究の効果を更に高めていきたいと思えます。

一連の取り組みを支える土台にあるのは、管理職も含めて教師同士が気軽に教えを求め合うオープンな雰囲気だ。和田校長も竹本教頭も、授業に入って担任を支援することもあるといふ。こうした学校文化があるからこそ、家庭学習の指導も学級を超えた共有や検討がスムーズに進んでいるのだろう。

次は中学校との連携の強化を視野に入れる。「既に、校区の中学校との生徒指導連携や互見授業などを導入しています。小中の学習姿勢の違いについては『スリーアップ作戦』でも考慮していますが、まだ段差があります。中学校と現状や課題を共有しながら、連携の基盤をつくりたいと思います」（和田校長）